
尊神

星見

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

尊神

【著者名】

星見

【あらすじ】

私は都市伝説が好きで、街で有名な噂を調査しました。すると

いま思えば、あれは夢だったのかもしれない……。

そんな、非現実的な出来事に、私は遭遇しました。

今私は病院の消毒くさいベッドの上。

頭には包帯。

そんな見た目ほど酷くはない傷だが、一応入院中。

なぜ、こんなことになつたか、これからお話ししますが、これは現実の話です。……たぶん。

私は佐々木優里。「ぐぐく普通の女子高生です。そんな私には一つ趣味がありました。それは都市伝説を調べることです。

都市伝説はご存知ですか？まあ、簡単に言っちゃえば噂です。人から人へ伝わることにより、尾ひれがついて大きくなる伝説。私はそれを趣味で調べてます。友達には変って言われるけど……。

私はこれまで結構調べてきました。

ミミズバーガー

死体洗いのアルバイト

口裂け女

首なしライダー

どれも結構有名ですよね？

調べるつていつも、パソコンとか携帯でサイトみつけて見比べたりしてるんですが、それだけじゃ物足りない。

それで最近友達に訊いた噂、路地裏の狼を調査することにしました。この噂は私の住んでる街での噂だから現地調査もできるし、私は結構ノリノリでした。

路地裏の狼 というのは、最近広まった都市伝説で、マックの路地裏に日本にはいない狼が出る、というものです。“噂の目撃者”曰わく、大人三人分の大きさはあるらしいんですが、普段はどこにいるんだって話ですね？

とにかく、私は調べました。主な方法は掲示板と聞き込み。その目撃者っていうのが実在するのかを突き止めたかったんです。

結果、目撃者は見つけられなかつたけど、その狼については少し判つたことがあります。

どうやら、狼が出るのはいくつか条件があるらしい。

一・真夜中、午前零時から一時の間

二・大神と掛けられた札をもつ

この二つらしいです。正直言つて意味がわからないけど、都市伝説というのはそういうもの。

というわけで、私は深夜、路地裏へ行くことにしました。もちろん、本当に出るとは思っていない、これは好奇心です。

+++++

「.....3.....2.....1.....」

午前零時。私は路地裏に来ていました。昼間でも薄暗い路地裏は、深夜は真っ暗で、懐中電灯がなかつたら来るのも難しかつたと思います。

片手には懐中電灯。もう一つは 大神 とマジックで書いた画用紙。

数分間待つてみたけど何も起きず、私はため息をついてました。

検証もすんだし、帰ろうと思い、札をくしゃつて丸めたとき、だだんだんつて大きな音がします。

規則的で、まるで足音みたいなものが私に近づいてくるように、どんどん大きくなつていき、私は焦燥に駆られ、自分でパニックが先行してしまい、逃げることもできず、情けなく震えて突つ立てました。

ぐぐあああああああああ

唸り声が足音に混じつて聴こえます。そして、突然ソレは現れました。

ぐげげがあああああああ

狂った唸りを響かせ、激しい足音を鳴らすソレは、私からしたら狼でもなんでもありません。

獸、でした。

ぐぐいああああああ

闇の中でもなぜかはつきり認識できるその姿。私の五倍はあるだろう体躯は闇色の体毛で覆われ、その双眸は獲物である私を残忍さと貪欲さを兼ね備えていました。時折、じゅるり、と舌なめずりが聞こえます。

ガリガリと四足歩行するその太い足には歪な鉤爪が備えられ、アスファルトを抉っています。

こういう時、人は二つの行動をとります。

一つは火事場の馬鹿力をだして逃げるか、へなへなと震えるかです。私は後者でした。

アスファルトに倒れこみ、巨大な獸を目を見開いて凝視したまま、ずるずると後ろへ後退。

ぐげげげええ

獸が、嘲笑いました。剥き出しだ口内に並ぶ醜い牙。だらんと唾液が零れています。ききいとアスファルトを削る爪も、私を引き裂こうとうずくづしているように思え、全身から血の気が失せました。

そして、獸は狩りの体勢に入りました。重心を低くし、瞬時に獲物を引き裂くような構え。あの牙の、あの爪の前ではあまりに無力な私は、かすれた声をあげることしかできません。

ぐがああいああ、あ、

獸が叫びました。それと同時に疾走し、私は体を強ばらせます。そ

の直後、しゃりん、といつ金属音が響きました。それに続いて獣の唸り声。

私の目には、左目から闇色の血をだらだら流してもがき暴れる獣が見えました。その左目には何かが突き刺さっており、ちゃり、と鎖が繋がっています。有り体に言えば、それはおそらく“鎖鎌”というものでした。ぐちゅゅりつ、獸がもがくたびに肉が抉れる音がします。

私の目は無意識に鎖が繋がる先を辿っていました。鎖は闇の中でもハツキリ見える銀色です。

じやり…

足音がします。これは間違い無く人間の足音。

男がいました。それも一人。両方とも闇に溶けるダークスースで、中に着ているシャツすら闇。その他一切が闇色です。

「あらや…一般人だ」

男の一人が声を上げました。高くも低くもない、極普通の声。鎖は男が握っていました。右手にもう一つ鎌を持ち、その鎖を左手で握っています。

「あーあ…どうまづああい！？」

男の声が奇妙に変わりました。それは、獸が鎖を噛み締め思い切り引っ張ったからです。男は鎖に引き吊られましたが、逆に自分から跳躍したように、高く跳びました。空中で体勢を整え、獸の真上へ。そして…。

ぐじじゅ…

再び肉が裂ける音が響き渡り、私の目には男の手にする鎌が獣のもう片方の眼を抉っている所が映りました。

「がやあ、い、ああ

獣が奇妙な断末魔をあげます。崩れ落ちる巨躯、男は双眸に突き刺さった鎌を抜き取り跳躍します。

「完了」

男が言った。

「あ……あの……」

これは私です。恐怖と畏怖と好奇心。それが私の体を支配していました。男は私を見て、暫し考えるように頭を搔きました。近くだから判りましたが、男の頭は坊主でした。

「……天義さん。一般人どうするんスか?」

悩んだ割に案外あっさりと助けを求めた男は、もう一人に向かつて振り向いた。もう一人の男はプカプカ煙草をくゆらせていたが、呼ばれたことに気づき、私の方へ歩いてきます。

「説明すればいいだろ? 隆地」

「いいんスか?」

「ああ、知らないってのは案外怖いし不安だからな」

そう言つて煙草の男はポケットから携帯灰皿を取り出して煙草を收めました。こちらの男は髪がちょっと長く、整髪料をつかって無造作にしています。

「えーっと、お嬢さん」

「へ？」

お嬢さんと呼ばれて正直面食らいました。だつて坊主の男も、顔を
みる限りではかなり若く、多分私と同じ年か、少し上くらいです。
「さつきのヤツ、えと、なんていうんだっけ？」

「路地裏の狼 …？」

「それそれ。あれな、噂神っていうんだ」

「う…うわ…さ…がみ？」

「そう、噂神。いつてしまえば都市伝説の種」

都市伝説の種？私の思考はいままでの非現実的な出来事で限界一步
手前でした。

「で、その噂神を殺すのが俺たちの仕事。」「
殺す…？」

あんな化け物を？私は信じられない気持ちで黒服の男を見つめています。

「そり、俺たちは 閻狩 。 いろいろあるんだけど、とりあえず話はここまで」

ちやり…と鎖の擦れる金属音が再び聞こえ、風を凧ぐ音が響きます。

「じゃね。ああ、この話あんま人に言わない方がいいぜ？可哀相な
眼で見られるからな」

それが最後でした。そこから先の記憶はぱつたりと切れ、気づいたら病院のベッド。母が言つには私が自分で転んで頭を打つて気絶してるとこを発見されたらしいんですけど…。

この話、結局なんだつたんですかね？

外国では メンイン・ブラック っていう都市伝説があるんですけど、これはUFOを叩撃または遭遇したときに現れ、警告するって話です。この都市伝説で映画も作られました。

彼らも、そういう存在だったのでしょうか？

謎ばかり残つてますが、私の話は終わります。これは引き続き調査ですね！

私は友達によく懲りないねって言われます。たぶん正解です。私の当面の目標は、彼ら闇狩を調べあげることにしました。

調査の結果はまた後日紹介できたらいいとおも.....

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4957d/>

尊神

2010年10月17日02時43分発行